

高専1年生に対する地域史教育の試み 近世・近代の讃岐史を題材として

中澤 拓哉*

Teaching Local History to 1st Grade Students of National Institute of Technology A Lesson Study of the History of Modern and Early Modern Kagawa

NAKAZAWA Takuya

概要

香川高等専門学校詫間キャンパスでは、1年生の必修科目として「社会Ⅰ」が置かれ、歴史系科目が教えられている。高専生は、基本的に大学受験で歴史系科目を用いることがない。したがって、大学受験に向けたカリキュラムとは異なる独自のカリキュラムで授業を行うことができる。筆者は「社会Ⅰ」において香川県（とりわけ詫間キャンパスが位置する西讃）の歴史を教えることを試みたので、これについて報告する。

キーワード: 歴史教育, 地域史, 授業実践, 讃岐史

第1章 はじめに

筆者は令和4年4月1日付で香川高等専門学校一般教育科に任期付助教として着任し、詫間キャンパスで「社会Ⅰ」の講義を担当した。これは1年生の必修科目であり、前任の教員が日本史を教えていたため、引き続き日本史の教科書¹⁾に基づいて行われることになっていた。2年生の「社会Ⅱ」は公民を扱うので、必修科目で歴史を教える機会はこの「社会Ⅰ」のみということになる（なお、4年生の「社会科学Ⅱ」はほぼ全員が履修しており事実上必修の歴史系科目となっているが、形式的には選択科目である）。

高専の1年生は通常の高校の1年生に相当するが、大学受験が想定されていないというのが大きな違いである。高専の5年間を終えた学生は、進路変更などをしない限り、受験で歴史系の科目を用いることがない。これは教員の側から見ると、「大学受験という拘束から

相対的に自由な教育を行うことが可能になる」^[38:448]ことを意味する。したがって筆者は、「社会Ⅰ」の講義で次の3点を目標に掲げ、独自の授業計画を立てることにした。

第1に、日本史のみならず世界史の基礎も講義することである。世界で活躍する技術者となる上で、日本だけでなく世界の歴史についての知識を備えている方が好ましいのは言うまでもない¹⁾。高専では「国際的に繋がる社会の多様な問題を解決できる技術者育成のために、自らが生きる世界が歴史的にどのように構築されてきたのか、幅広い視野を持たせるために社会科教育は行われなければならない」^[27:59]のだ。

第2に、積極的に地域史を取り入れることである。香川県、とりわけ本キャンパスが立地する西讃の歴史について、可能な限り講義で扱うことを心がけた²⁾。大学受験は全国共通のカリキュラムを前提としているため、受験のための歴史では地域史が等閑視されやすいが、本講義は受験を前提としないので、地域史について

* 香川高等専門学校 一般教育科

て掘り下げて教えることが可能となる。その際、通史ののちに地域史を教える、という形ではなく、通史の中に地域史を組み込んで教える、という形式を取った。これは、地域史がより広い歴史の一部であることを、学生が自然に意識できるようにするための試みである。

最後に、日本史と世界史、そして地域史を1つの授業の中で講義することである。必修科目で歴史を扱うのが1年間しかない以上、世界史と日本史とを分けて講義することはできないし、日本と世界、そして地域の歴史が連動していることを教えることは重要な課題である。同様の問題意識に基づいて令和4年度から「歴史総合」が導入されたが³⁾、「歴史総合」が近現代史のみを扱うのに対し、本講義では前近代の歴史も扱う⁴⁾。また、単に日本史と世界史とを融合するだけでは「地域からの視点が欠落することにもなりかねない」^[17:48]という指摘を踏まえ、本講義では日本史と世界史とを融合させた上に地域史を加えることとした。

本稿は、上述のような問題関心に基づいて「社会Ⅰ」における地域史の教育実践を報告し、高専における歴史教育の充実に寄与することを目的とする。報告にあたっては、板書計画のうち地域史に関する箇所を示す。

なお、本稿で取り扱う時代は近世以降に限っている。古代史では紫雲出山遺跡^{しうでやま}が西讃の地域史を教える上で重要ではあるが、着任直後であったため訪問して展示を見学するのが精一杯で、高地性集落の代表的な遺跡として名前を出す程度に留めてしまい、近年の研究成果^[5:13;24:25]を授業に反映させることができなかった。また、律令制下で讃岐国に11郡が設置されたことも触れたが、トリヴィアルな知識の提示に留まり、試験でも出題しなかった。このように、本格的に香川県の地域史に授業で触れるようになったのは近世以降であるため、本稿は近世以降の授業実践に絞って論じる。

最後に、本授業の試験形式について説明しておく。本授業の試験は、「Ⅰ 語句選択」「Ⅱ 正誤問題」「Ⅲ 語句記述」「Ⅳ 論述問題」「Ⅴ 史料読解」という構成になっている。Ⅰは選択肢から適切な語句を選ばせるものである。Ⅱは、前期の試験では複数の文章から正文あるいは誤文を選ばせるものだったが、平均点の上昇を図るため、後期からは1つの文章の正誤を○×で答えさせる形式にした。Ⅲは適切な単語を答えさせるもので、Ⅳは歴史上の事象や概念について説明させるものである。そしてⅤは、初出の史料を用いて、穴埋めをさせたり、文中に下線を引いて何を指しているかを問うたり

するものである⁵⁾。

第2章 近世の讃岐

第1節 授業の内容

本年度の後期中間試験は、戦国時代からフランス革命までを範囲とした。江戸時代をペリー来航の直前まで終わらせてから産業革命の講義に移行し、そのままフランス革命までは世界史の講義を行ったため、幕末を除く江戸時代が範囲に含まれることになる。

授業の順序としては、織豊政権から徳川家康までの天下統一、そして徳川家光までの江戸幕府初期について扱った後、満洲人と清朝の建国、シベリアやインドの植民地化の講義を挟み、北アメリカでの13植民地の形成を終えてから徳川家綱以降の歴史を説明した。そして慶安の変や岡山藩などでの藩政改革に触れてから、讃岐における三藩体制の確立、および島嶼部の歴史と宗教事情について、次のように板書して講義した。

1640年 生駒騒動——生駒家は改易
 1642年 松平頼重が高松藩領主となる
 →松平家による東讃統治——水戸藩と密接な関係
 1642年 山崎家が丸亀藩領主となり西讃を統治
 →1658年 京極家が丸亀藩領主となる
 →1680年頃 丸亀城築城——丸亀が城下町として発展
 1694年 京極家の分家が多度津藩創設

小豆島・直島諸島——大部分が幕領に
 塩飽諸島——650人の人名による自治(塩飽島中)
 →塩飽勤番所の建設

四国遍路の確立——本山寺などの寺院が整備
 →各地に「移し霊場」

金毘羅参詣の形成——伊勢神宮に次ぐ参詣者を集める
 西讃・島嶼で両墓制が普及——埋め墓と拝み墓を区別

生駒親正が讃岐を与えられたことは戦国時代の講義で板書済みであったので、それを想起するよう促した上で、生駒家は外戚の藤堂高虎と協力し讃岐を統治していた旨を補足した。そして生駒騒動後に讃岐が東西に分割され、高松藩と丸亀藩および多度津藩が成立し、現三豊市が丸亀藩に含まれることを確認した。なお、初代高松藩主松平頼重が徳川光圀の兄であることは

口頭で補足した（光圀については、江戸期における藩校の設置について解説したときに板書済みである）。

小豆島や直島については、その大部分が幕領であったと板書した上で、讃岐側ではなく倉敷の代官が統治していた旨を口頭で補足した。

塩飽諸島の説明にあたっては、口頭で「人名とは船乗りのうち人名株を保障された 650 名を指す」と補足した。また、人名と書いて「にんみょう」と読ませるのは難しいと考えたため、板書に際しては読み仮名を振り、「塩飽島中」が塩飽の自治政府を指す名称であること、および、江戸時代に幕府や藩に属さず自治を行っていたのは全国で塩飽諸島だけであることも言い添えた⁶⁾。

本山寺は、香川県に所在する国宝のうち、授業時点で唯一三豊市に所在するものであるため、板書に取り入れた。「移し霊場」に関しては、口頭で概要を説明し、小豆島八十八ヶ所や粟島八十八ヶ所などの例を挙げた。金毘羅参詣については、近年の研究^{18,20)}も参照し、丸亀うちわが金毘羅参詣の土産物として発展したことなどにも触れながら論じた⁷⁾。西讃における両墓制については、厳密には三豊・多度津・観音寺のみに限られることや、島嶼部では志々島ししじまのものが特に有名であることを口頭で補足した。また、筆者が実際に塩飽諸島ほんじまの本島を訪れて両墓制の墓地を見学した際の様子も説明したが、筆者の説明能力の限界ゆえかうまく伝わらなかったように思う。

続いて、元禄文化や享保の改革について板書した後、江戸時代に各地で産業が発達したことを講義し、五街道や飛脚といった陸上交通の発展について説明した。

年貢米（蔵米）の大量輸送——水上交通の発達を促す
→各地で港や河岸が整備、内水航行できる高瀬船利用
→廻船による海上輸送——東廻り海運⇔西廻り海運
→塩飽発祥の弁才船べんさいせんが全国に普及（北前船）
庄内八浦——宝暦期（1751～1764）に塩飽を逆転
→粟島が交易の拠点として繁栄
18～19 世紀 仁尾が交易の拠点として繁栄

庄内八浦については、香田こうだ・大浜浦おおはま・積浦つむ・箱浦はこ・生里浦なまり・粟島あわしま・志々島ししじま・家浦いえうらを指すことを口頭で補足した⁸⁾。本キャンパスは庄内半島の付け根にあたる位置にあり、また粟島が教室の窓から見えるので、そのような地理的位置関係にも注意を促しつつ講義を行った。加えて、これらの地域が丸亀藩に属していたこと

や、粟島船に関する古文書が北海道や新潟などの遠隔地に残されていることも、郷土史家の著書³⁶⁾を参考にして説明した。また、筆者が実際に粟島を訪れて城山じょうのやまに登った際の様子を話したり、瀬戸内国際芸術祭が開催されていることに注意を促したりした。

仁尾にのおに関しては、「千石船見たけりゃ仁尾に行け」という俗謡があるほど繁栄しており、土佐藩の参勤交代は一時期仁尾を経由していたことを口頭で補足し、仁尾の街並みにはかつて港湾都市として栄えた面影が残っていることを、筆者が仁尾を訪れた際の印象に即して伝えた。

第2節 試験の内容

以上のような講義内容を踏まえて試験を作成した。試験のおよそ2週間前には、Teams において、論述問題の内容と、江戸時代の庄内半島から出港した廻船に関する史料を出題する旨を告知した。

以下が、実際に実施した試験のうち地域史に関する設問である（地域史と関係のない設問は割愛した）。

I 語句選択（配点2点×9問）

- (1) 江戸時代に西讃統治の拠点であった都市はどこか。
(ア) 高松 (イ) 丸亀 (ウ) 詫間 (エ) 宇多津 (オ) 観音寺
- (2) 高松藩の初代藩主を選べ。
(ア) 生駒親正 (イ) 京極高和 (ウ) 松平頼重 (エ) 水野忠邦 (オ) 徳川家光

II 正誤問題（配点2点×9問）

以下の各問について、正文ならば○を、誤文ならば×を、それぞれ解答欄に記せ。

- (5) 多度津藩は高松藩の支藩として成立した。
- (6) 塩飽諸島は、丸亀藩が派遣した「人名」と呼ばれる代官によって統治されていた。

III 用語記述（配点3点×8問）

- (6) 18世紀から19世紀にかけて交易で栄えた現三豊市内の港の名を漢字2文字で記せ。

V 史料読解（配点4点×5問）

次の文は、江戸時代に庄内半島つむの積浦から出港した船の記録である。読み、問いに答えよ。

(a)享保の頃積浦の〔船が〕住吉御領の(b)材木を積み、江戸へ回る。紀伊国まで無事に至りしが伊勢の沖より大風に吹き放され、船人水夫ともに十人を失い嘆きける。されば千尋の海なれば碇にてもとどまらず、時に船頭のいうよう、とにかく(c)我が〔讃岐〕国の大権現へ祈り奉るよりほかなし、と皆一同一心に今度の急難を救い給えと祈りける。不思議や俄に沖の方より順風吹き来りて、船中の人々活かえりた心地して下帆をあげんとせしに、沖のかなたより船一艘見えければ程なく近づき問いければ讃岐船と答えける。所はと問えば、なりという。拆ては同浦なりと互に力を得て、不思議さ、嬉しさ限りなく、ともに船に帆をあげて無難に江戸(c)深川へと落つけり。其の俣御屋敷へ訴え、難風に逢い申すゆえ荷物少々捨てて仕まい候と申し上げぬれば、奉行所より仰には、難風に逢い荷物捨ては苦しからず人の損じさえなくば目出し、と役人を差越されて船中見分どもさせ、当座に褒美など給いけり。偏に大権現の御加護なりと悦び信じ尊みけり。

(問題文の典拠は、『新修詫問町誌』詫問町、1971年、267-268頁。問題文として成立させるため、仮名遣いを現代仮名遣いに改めたり、送り仮名を付け加えたりするなどの改変を加えた)

- (1) 下線部 a の時代に改革を行った将軍の名を漢字で書け。
- (2) 下線部 b に関連して、江戸時代には廻船による海上輸送が発達したが、その際、塩飽諸島発祥の弁才船が全国に普及した。弁才船のより一般的な呼び方を漢字で記せ。
- (3) 江戸時代、下線部 c の神社は多くの参拝者を集めた。この神社への参詣を何と云うか、漢字で記せ。
- (4) 空欄 d に入る島の名を漢字で記せ。
- (5) 下線部 e の出身者の 1 人に、滝沢馬琴がいる。彼の代表作の題名を漢字で記せ。

第3節 試験の振り返り

以下では出題の意図を説明する。

I (1) (2) は純粋な知識問題である。初代高松藩主として生駒親正を答えた学生が何人か見受けられたが、惜しい間違いであり、部分点をあげたいところだった。

II (5) も純粋な知識問題であるが、仮に多度津藩が丸亀藩の支藩であることを忘れていても、讃岐が高松

藩と丸亀藩で東西に分割されていたという史実と讃岐の地理をあわせて考えれば、多度津藩が高松藩の支藩である可能性は低く、誤文である蓋然性が高いと判断できる(封建制下では領地が飛び地状になることもあり得るので、確実な解法とはいえない)。

II (6) は、正解者が 125 人中 39 人(正答率 31%)であり、正答率が予想外に低いことに驚かされた。塩飽諸島が他の藩などから独立した自治領であったことは授業で強調したつもりなのだが、それがあまり理解されていなかったことを意味している。

III (6) は地域史に関する単純な知識問題である。(正答は「仁尾」)。他市町村出身者に比べ三豊市出身者に有利になっているかと思いきや、答案返却の際に正答がわからないという市内出身者がいたので、出身地によって正答率が変化するということはなさそうだ⁹⁾。

V (1) (2) (5) は純粋な知識問題であり、おおよそ日本全国で通用する問題であろうと思う(それぞれ正答は「徳川吉宗」「北前船¹⁰⁾」「南総里見八犬伝」)。

V (3) は予め解答欄に「参詣」と印刷してあるので、「金毘羅」と書いてあれば正解である。「金刀比羅」「琴平」も認めた。毘や羅などの漢字を誤っている場合は減点したが、「琴金」のように原型を留めていない解答は不正解とした。

V (4) は、正解者が 125 人中 50 人(正答率 40%)であり、空欄のまま提出するか「小豆島」(26 人)や「淡路島」(5 人)など別の島の名を挙げる学生も多かった。

「島」と問題文に明記してあるにもかかわらず、「荘内半島」と答えた者も数人いた。また、正解者に解答の根拠を尋ねてみても、当てずっぽうという答えが返ってくる場合もあった。

出題者としては、「沖のかなたより船一艘見えければ程なく近づき問いければ讃岐船と答えける。所はと問えば、なりという。拆ては同浦なりと互に力を得て」という文章が手がかりになるよう作問したつもりであった。つまり、この積浦出身の船乗りたちは、「讃岐船」と聞いて同郷だと喜んだのではなく、讃岐のどこか、と更に問いを重ね、という答えを得たことによって初めて同郷だと喜んでいるのである。そうすると、小豆島や塩飽諸島のような、荘内半島とは異なる行政区画に属していた島嶼は答えではない。また、問題文で「島」と限定してあることから、香田や箱、生里といった荘内半島にある他の浦も正答たり得ない。したがって正答は「粟島」ということになる¹¹⁾。

第3章 近代の讃岐

第1節 授業の内容

本年度の後期末試験は、ナポレオン時代から第一次世界大戦の勃発までを範囲とし、そのなかで、明治維新とそれによる香川県の創設とを扱った。

授業の順序としては、ナポレオン以降のヨーロッパ史、ワッハーブ派の出現やスエズ運河建設などの近代中東史、そしてアメリカやオーストラリアといった白人植民地の国家形成について講義した後、アヘン戦争とペリーの来航から戊辰戦争、明治改元へと至る過程を説明し、高松藩は鳥羽・伏見の戦いで新政府軍と交戦したため朝敵とされ、新政府側についた土佐藩や丸亀藩の藩兵によって占領されたと述べた上で、次のように板書した。

1869年1月 版籍奉還の上表——**廃藩置県**開始
 →高松県と丸亀県を統合——第1次**香川県**設置
 1873年 **名東県**設立（阿波・讃岐・淡路）、徳島に県庁
 →1875年 阿讃分離——第2次香川県設置
 →1876年 香川県廃止、愛媛県に併合

ここでは、廃藩置県の概要と香川県の設置について概説し、新政府内に県の統廃合を推し進め広域府県を実現しようとする主張があり^[4]: 17-18]、そのために香川県が2度にわたり廃止されたことを説明した。各地で廃藩への抵抗が生じ、1876年には高松藩で藩主引留一揆である簗笠騒動が起きたことや、多度津藩が廃藩とされ倉敷県の管轄となったこと、丸亀藩は廃藩置県し丸亀県となって旧多度津藩領を管轄したこと、そして第1次香川県が小豆島西部を北条県から引き継ぎ新居などを松山県に移管したこと（説明にあたっては新居浜高専に言及した）は、口頭で補足した。

続いて、明治政府の経済・産業政策を説明した。

1871年 新貨条例——円・銭・厘が新通貨に
 →1872年 国立銀行条例
 →1878年 高松で**第百十四国立銀行**創立
 →1882年 **松方正義**が**日本銀行**創設
殖産興業政策——経済の近代化を推進
 →1870年 **工部省**、1873年 **内務省**設立
 →1871年 前島密の意見で郵便事業設立
 →各地で鉄道・電信の敷設——新橋・横浜間鉄道など

→1889年 丸亀・琴平間、1897年 高松・丸亀間に鉄道
 →1894年 四国新道完成
 →1872年 **富岡製糸場**開業、小豆島や坂出にも紡績工場

第百十四国立銀行は、言うまでもなく現在も存在する百十四銀行の前身であり、香川高専の学生として知っておくべき知識であると考えて教えた。翌年には丸亀で第百廿七国立銀行が創立されたほか、宇多津銀行などの銀行が次々と県内で創立されたことは口頭で補足した。そして新橋・横浜間鉄道を説明したのちに、金毘羅参詣のために最初に琴平までの鉄道が整備されたことや、丸亀や善通寺、琴平から高知・松山を繋ぐ道路である四国新道が開通したことを説明したり、富岡製糸場を教えてから小豆島・坂出にも紡績工場が作られたことを教えるなど、最初に全国での展開を講義してから香川県の発展を論じることで、香川での経済・産業の発展をより広い歴史的背景のなかに位置づけることを意図した。

これに続けて、文教政策について以下のように板書し、講義を行った。

1871年 **文部省**設置——国民皆学をめざす
 →全国に小学校や中学校、師範学校が設置
 →1890年 **教育勅語**
 →1897年 粟島航海学校開校（のちの粟島海員学校）

近世でも扱った粟島が近代では海員養成の拠点として用いられており、その学校の建物が粟島海洋記念館として今も残っていることを説明した（授業時点および本稿執筆時点において、同館は修復作業により見学できない）。なお、教育勅語については、訳註^[5]を参照しつつ、それが天皇制に奉仕するための臣民を育成するという反民主的な目的で書かれたものであり、現代に応用するものではないことを強調した。

以上のように明治政府の施策を講義し、文明開化について説明した後、そのような急速な近代化に対する武力での抵抗について板書した。そのなかで地域史に関わるのは、徴兵令反対一揆についての説明である。

徴兵令反対一揆（**血税一揆**）
 →1873年 **西讃竹槍騒動**——豊中を起点に西讃に拡大

1873年に香川県西部で起きた徴兵令反対一揆の起点

となった豊中^{とよなか}は現三豊市内であり、詫間キャンパスで学ぶ学生にとって重要な知識であろうと考えて教授した。このように徴兵令反対一揆のほか、解放令反対一揆、学制反対一揆、そして土族反乱といった明治政府への武力抵抗の歴史を概観した後、武力に拠らない抵抗として自由民権運動を解説し、板垣退助が高知出身であることも付け加えた。これに続けて華族や内閣といった制度の創設と大日本帝国憲法の制定、帝国議会の開設について講義し、大日本帝国憲法が権力分立的な憲法であったことがのちに政治問題となることを解説した後、ちょうどこの時期に実現した第3次香川県の設置について板書した。

予讃分離運動——香川の愛媛からの独立を求める
→1888年 第3次香川県設置、『香川新報』創刊

ここでは、讃岐人が愛媛からの独立運動を繰り広げ、政府内に反対意見はあったものの最終的には置県が実現したことを説明した¹²⁾。また、置県に伴い、現在の『四国新聞』の前身となる『香川新報』が創刊されたこと^{13) 14)}も説明した。

続いて、日本の近代化に伴う東アジアの国際秩序の変容を解説した。最初に、ロシアの脅威が迫る中で、従来は異民族の土地として扱われていたアイヌモシリを日本の領土にしようという動きが出てきたことを、近世史の授業で扱ったアイヌモシリに関する知識を想起するよう促しつつ説明し、「北海道」への改称と開拓使の設置によって日本が正式にアイヌモシリを併合したこと、アイヌモシリを「開拓」するために屯田兵を送り込んだこと、そしてそこには香川出身者も含まれていたことを、次のように板書しつつ講義した。

1869年 蝦夷地を北海道と改称、開拓使を設置
→屯田兵による「開拓」、香川からも開拓団派遣

香川からの開拓団がアイヌモシリの寒さに苦しんだことを挿話として紹介した後、樺太・千島交換条約について白板に地図を描いていわゆる北方領土問題と絡めて解説し、日本が樺太アイヌや千島アイヌを強制移住させたことや、北海道旧土人保護法によりアイヌへの同化政策が進行したことを講義した（その際は、北米史で扱ったドーズ法との関連性にも注意を促した）。

この後は、琉球処分や不平等条約の改正について教

えた後、19世紀におけるイギリスやフランスからメキシコやシャムに至る世界各地の近代国家建設を講義し、その一環として財閥の形成など日本の近代化を扱った。そして欧米諸国が世界を分割していったことや日本が朝鮮をめぐる日清戦争と日露戦争を戦ったことを解説した後、辛亥革命とサライェヴォ事件について教えたところで後期の全授業が終了することになった。

第2節 試験の内容

以上のような講義内容を踏まえて試験を作成した。史料読解では、1916年にロシア大公ゲオルギー・ミハイロヴィチ（Георгий Михайлович）が日本を訪問し、瀬戸内海を横断して香川県沖に停泊^{28: 35-37)}した際の『香川新報』の記事を用いた。これは授業で教えた範囲を外れるし、そもそも第一次世界大戦で日露が同盟関係にあったこと自体を教えていないのだが、それらの史実を知らなくとも解答が可能なように作問した。

中間試験と同様、試験のおよそ2週間前にTeamsで論述問題を公開したが、期末試験ではそれだけでなく、出題予定の史料の全文を提示し、この史料に即した問題を出題する旨を告知した。これは、従来扱ってきた史料よりもいささか長めであり、試験時間中に読んで理解することは学生によっては困難であろうと判断したためである。加えて言えば、平均点を向上させ、欠点になる者をなるべく減らそうとする狙いもあった。また、史料中に現れる「皇族」は授業で扱っておらず、誰のことかを知らずとも解答に支障はない旨も告知した。

以上のような準備の上で後期期末試験を実施した。以下が、実際に実施した試験のうち地域史に関する設問である（地域史と関係のない設問は割愛した）。

Ⅲ 用語記述（配点3点×8問）

(7) 1878年に高松で創設された国立銀行の名を漢字で答えよ。

Ⅴ 史料読解（配点4点×6問）

次の文は、1916年にある国の皇族が日本を訪問した際の新聞記事である。読み、問いに答えよ。なお、[]は出題者による補足・省略である。

(a) 露国ゲオルギー・ミハエロキツチ大公殿下の御召艦
鹿島は護衛艦敷島と共に [……] 関門海峡を通過し九
日夜は伊予三津ヶ浜沖に十日夜は小豆島池田湾沖に

仮泊し十一日午前十一時より正午迄の間に **b** 港へ入港 [……] 午後七時十分 **b** 駅発特別列車にて御東上の筈に承れる [……]。

殿下は軍艦に召すのはお珍しいそうで航海を御満足に思われて居られるが、特に開門以来瀬戸内海明媚の風景は一段のお気に入り。[……] 十日の瀬戸内海は(c)油絵の如き無数の島嶼を親しく御覧になる為には最近距離を眺め得られる前方のブリッジ [軍艦の指揮所] に進まれ田中大佐 [が] 御説明を申し上げて一層御満足の御模様でありしと申す。[……]

[取材を終えて] 鹿島艦を辞したる記者団は [……] 敷島艦に供乗せる接待官長ともいふべき寺内 [正毅] (d) 朝鮮総督を訪いたるに [……] 副官が出て迎えて事務室のような所に案内す、是非に一寸でも総督に御目に掛かりたいと其の意を通ぜられんことを請えるに並み居る人々 [に] 総督の面会せざるべきを語り明日 **b** に上陸しても殿下と共に宮中列車でツーッと上京するのであるから **b** でも新聞記者に会われまい [……] と云うや記者団中には其の失望は却って憤慨の色を現わし [……] 怒号し其の余勢は総督の人格 [への攻撃] に及ばんとせしが、流石如才なき副官は之を抑えて諸君の意思は必ず閣下に通ずると出てたり、やがて一同屋島丸 [記者団が乗ってきた船] に引取りし頃副官追いまりて諸君の意思ある所を只今閣下に申し上げたるに宜しく伝令せよとありしと謝意を伝え、如何にも迷惑そうに船に帰ったり、これが若し(e)大隈伯であつたら 霄壤の差であろうと一同笑つたことである。

※殿下……皇族や王族への敬称。

※御召艦……天皇や皇族が乗る軍艦のこと。

※三津ヶ浜……現在の愛媛県松山市三津浜。

※副官……高位の軍人を補佐する役職。

※如才なき……気が利いている。

※閣下……高位の官職にある者への敬称。

※霄壤の差……天と地の差。

(問題文の典拠は、『香川新報』1916年1月9日および12日の記事。問題文として成立させるため、仮名遣いを現代仮名遣いに改めたり、送り仮名を付け加えたりするなどの改変を加えた)

- (1) 1894年に即位した下線部 a の皇帝は誰か。
- (2) 空欄 b の都市は 1858 年の条約に基づき開港された。この都市の名を漢字で記せ。
- (3) 下線部 c に関連して、「印象・日の出」という題の油絵を描いた画家は誰か。
- (4) 下線部 d の役職が置かれるまでの経緯を時系列順に並べたとき、正しい順序はどれか、ア～カから選べ (左が古い時代を示す)。
 - (A) 安重根による伊藤博文の暗殺
 - (B) 東学が率いる大規模な農民反乱
 - (C) 東郷平八郎によるバルト海艦隊の撃破
 - (ア) A→B→C (イ) A→C→B
 - (ウ) B→A→C (エ) B→C→A
 - (オ) C→A→B (カ) C→B→A
- (5) 下線部 e の人物について、正しい文を選べ。
 - (ア) 初代内閣総理大臣に就任した。
 - (イ) 郵便事業を設立すべきであると意見した。
 - (ウ) 開拓使官有物払下げ事件をきっかけに下野した。
 - (エ) 薩英戦争に衝撃を受け、薩摩藩の藩政改革を推進した。
 - (オ) 新政府に不満を持ち不平士族を糾合して反乱を起こした。
- (6) この新聞は、1888年に第3次香川県が設置されたことをきっかけに創刊された。このとき香川県は何県から分離したか、漢字で答えよ。

第3節 試験の振り返り

以下では出題の意図を説明する。

Ⅲ (7) は、現在の香川県の主要銀行の1つである百十四銀行の前身を問う問題である。年号と創設地、そして国立銀行という指定で、1879年に丸亀で創立された第百廿七国立銀行など他の銀行ではなく、第百十四国立銀行のことであると判断できるようになっている。ただし、百十四銀行とだけ書いた者も多くおり、現代との繋がりを重視して教えたことを鑑みて正答とした。

V (1) と (3) ～ (6) は純粋な知識問題である (正答は順に「ニコライ2世」「モネ」「エ」「ウ」「愛媛県」)。

V (2) は、事前の予告が功を奏し、123人中96人が正答することができていた (正答率78%)。学生に解答の根拠を問うてみたところ、筆者の想定通りの解法を披露してくれた学生もいれば、「友達がそう言っていたから」と答えた学生もいた。史料を事前配布すること

は平均点向上に繋がる一方、このように他力本願で解答する学生を生み出してしまうので、良し悪しである。

本問は、幕末日本の対外関係に関する一般的な知識と、瀬戸内海の地理の双方を組み合わせて解くことを想定した。まず、「1858年の条約」が日米修好通商条約であり、同条約の開港地が横浜・長崎・新潟・神戸・箱館であると想起せねばならない。その上で、「九日夜は伊予三津ヶ浜沖に十日夜は小豆島池田湾沖に仮泊し十一日午前十一時より正午迄の間に **b** 港へ入港」という旅程を見れば、5つの開港地のうち、松山から小豆島まで1日かかる船が小豆島から半日で辿り着ける港は神戸しかないので、空欄 **b** は神戸であることがわかる。

なお、本問で日米修好通商条約と日米和親条約とを区別する手がかりになるのは1858年という年号のみであり、そこまで憶えてこなかったという学生もいるかもしれない。だが、日米和親条約における開港地は箱館・下田であり、いずれも松山沖から小豆島沖まで1日かけて航行した船が半日で到着できる立地ではないことから、日米修好通商条約だと判別できる。

第4節 追試の内容

本試験には2名の学生が欠席し、うち1名は追試を希望したので、追試を行った。以下は、その追試のうち地域史に関わる出題の抜粋である。

I 語句選択 (配点2点×8問)

- (6) 戊辰戦争で新政府側についていない藩はどれか。
 (ア) 薩摩藩 (イ) 長岡藩 (ウ) 佐賀藩
 (エ) 丸亀藩 (オ) 長州藩

II 正誤問題 (配点2点×8問)

以下の各問について、正文ならば○を、誤文ならば×を、それぞれ解答欄に記せ。ただし、○×のいずれかが計3個未満である場合、II全体の得点を0点とする。

- (6) 1873年に豊中で起きた徴兵令反対一揆は西讃一帯に拡大した。

V 史料読解 (配点4点×6問)

次に掲げるのは、19世紀に愛媛県で出版された雑誌の抜粋である。読み、問いに答えよ。なお、[]は出題者による省略・補足である。

「条約改正に就て」『予州雑誌』第2号、1889年7月30日。

目下の大問題なる(a) [不平等] 条約改正は、世論紛々として底止する所を知らず。吾輩は之に反対を試みん乎、之を扶けて成功を期せん乎。昔時英相ベコズフヒルド侯 [ディズレーリ] が(b)伯林の会議を終わって、ドーヴァー港に帰着するや、英人は山の如く岡の如くに打ち集いて、歓呼湧くばかりの裏に侯は平和、榮譽、国民の繁昌を持ち帰れると誇称し、而して侯の倫敦に帰るや、(c)女王陛下をはじめとし、衆民共に侯の功業を賞揚したり。[……] 英人の大多数は侯の功を賞して任せる時に、独り(d)「リベラル」中の諸名家は侯が[……]ブルガリアを二折し、新に東ルメリ州を立てたるを非難したが、後果たして此二州 [ブルガリアと東ルメリ]は合併して、(e)東方問題 [はこのために沸騰するに至れり。吾輩は英人の大多数に習わん乎。將たりベラル中の名家に習わん乎。凡そ政論擾々の中に処しては、宜しく注意して諸事の判断を下すべきが、中にも条約改正の如き、国家的の問題に対しては、党派心を去り、感情を捨て、精細緻密に可否得喪を度量すべきこと勿論なり。[……]

※將た……あるいは。

※擾々……乱れているさま。

(問題文の典拠は、『愛媛近代史料13 明治前期政治運動史料 第3輯——国会開設前後(II)』近代史文庫、1965年、94頁。問題文として成立させるため最小限の改変を加えた)

- 下線部 a の1つである日米修好通商条約で開港された港の名を漢字で1つ書け。
- 下線部 b を主催した人物の名を記せ。
- 下線部 c の個人名を記せ。
- 下線部 d の思想を日本語で何というか、漢字で記せ。
- 下線部 e に関して、間違った文を選べ。
 (ア) 19世紀前半のセルビア蜂起を経てセルビア公国が成立した。
 (イ) モンテネグロではニェゴシュによって長編叙事詩が執筆された。

- (ウ) ワラキア・モルドヴァ両公国が合併してルーマニアが成立した。
- (エ) ギリシャ独立戦争に対して西欧は非常に冷淡で、何の支援も行わなかった。
- (6) この史料の著者の主張として間違った文を選べ。
 - (ア) ベルリン会議によって東方問題は完全に解決した。
 - (イ) ディズレーリの外交政策は長期的な目線で見れば間違っていた。
 - (ウ) 重要な政治的問題については、党派にとらわれず大局的な視点で考えるべきだ。
 - (エ) 成功を収めたと主張し人気を得ようとする政治家に対しては懐疑的になるべきだ。

第5節 追試の振り返り

以下では出題の意図を説明する。

I (6) は奥羽越列藩同盟に関する知識問題である。丸亀藩については、先述の通り口頭で新政府側についてと説明しただけなので判断が困難かもしれないが、長岡藩がどう見ても奥羽越列藩同盟の一員であるので、解答に支障はないと判断した（なお、受験者の解答はウの佐賀藩であった）。

II (6) は西讃竹槍一揆の知識を問う問題であり、受験者は正解した。

Vは、愛媛県の史料を利用して日本史・世界史双方の知識を問うたものである。香川県の地域史ではないが、広く四国に関わるものとして本稿で扱う。(1)～(5)はいずれも純粋な知識問題であり（正答は順に「箱館／新潟／横浜／神戸¹³⁾／長崎」「ビスマルク」「ヴィクトリア」「自由主義」「エ」¹⁴⁾）、(6)は国語的に正答を導ける問題となっている（正答はア）。この問題は地域の史料を使って日本史や世界史の事項を問う試みであり、個々の問題それ自体は地域史と関わりがない。

第4章 おわりに

以上が、令和4年度の「社会I」における地域史の導入の概要である。以下に反省点と今後の展望を示す。

まず、授業の最初で「暗記よりも歴史の流れの理解を目指す」と発言したはいいいものの、結果として実に古色蒼然とした知識詰め込み型の講義になってしまった感は否めない。「これは知っておいてほしい」という事柄を集めた結果として詰め込みを強いてしまったこと

については、まさにかつて指摘されたような、善意に基づき「素朴な分類学」を強要する苦役¹⁵⁾であると言われても仕方がない¹⁵⁾。試験における論述問題や史料読解の出題は、単なる丸暗記ではなく「考えさせる」ことを目的としたものであったが、リード文を読まずとも解けてしまうような問題¹⁶⁾が一定数含まれてしまっていることも事実である。講義形態の変更は授業時間数と教育内容の兼ね合いもあって難しいが、令和5年度はもっと学生の興味を引くような工夫を行っていきいたい¹⁶⁾。

また、授業が第一次世界大戦までに留まってしまい、直接現代へと繋がる第二次世界大戦以降の歴史にまったく触れられなかったことは悔やまれるところである。筆者がその時期を専門としているという個人的な理由だけでなく、文系学部に進むわけではない高専生にとって、最も勉強の内容を「役立てる」ことができる時代だからである。「同時代認識を持つことは、日々目まぐるしい情報に晒され、次々と選択を迫られる現代社会を生きる生徒や私たちにとって、ひとつの有力な手がかりとなりうる」がゆえに「現代史教育の欠落は許されない」のであり¹⁷⁾、歴史系科目の授業時間数が普通科高校などと比べて少ないという高専特有の事情¹²⁾を考慮しても、筆者の時間数の見積もりが甘すぎたことは反省せねばなるまい。「最後まで教えるにはなにとなにをどういう時間配分で教えたらいいか、どこをスキップしたらよいかという検討」¹³⁾が欠けていた。令和5年度は、より内容を精選して講義に臨みたい。

最後に、本授業での実践から、世界史・日本史を総合した科目（歴史総合など）での作問にあたっては、日本の新聞や雑誌を史料として用いることが有益である、と主張したい。たとえば筆者が用いた史料は、東方問題に対するディズレーリの外交政策を例に出して当時の日本の条約改正問題に対する主張を述べるという内容であり¹⁷⁾、この史料を使えば、本稿で示したように、イギリス史・バルカン史・日本史という様々な分野に関する出題を一度に行うことが可能となる。

もちろんこれはバルカン地域研究やイギリス外交史研究という文脈では一次史料とはいえないが、「日本における外国観」という文脈では立派な一次史料なのであり、高校レベルの歴史教育で読解する史料としては十分なのではないだろうか。歴史総合など世界史・日本史双方の知識を問いたい場合には、外国の史料だけでなく、日本の新聞や雑誌、あるいは外交文書を使

うことも検討されてよいように思われる¹⁸⁾。そうすれば試験問題として使える史料は大幅に増えるだろうし、研究者ではない一般の教員にもアクセスしやすいので、史料を使った授業や試験の準備が容易になるだろう。

付記

本稿は4年度香川高等専門学校校長裁量経費による成果の一部である。

注

- 1) たとえば本校は、台湾や韓国、タイといった国々の工業大学と学術交流協定を結んでおり、少数ながら留学生も受け入れている^[10:28-29]。国際交流にあたり相手国の歴史について多少でも知識があった方が望ましいことは論を俟たないだろう。
- 2) 本授業で用いた地域史に関する情報は、基本的には香川県および三豊市が編纂した地域史^[8:9, 29; 30; 31]に拠った。以下では、それらの文献から得た情報については逐一出典を示さない。その他の文献や博物館の展示などから情報を得た場合は、適宜出典を示す。
- 3) 「歴史総合」の概要と問題点については、新谷崇が的確にまとめている^[2]。
- 4) なぜならば、近現代史を理解する上ではそれ以前の歴史に対する一定の知識が必要だからである(たとえば、日清戦争を教えようと思ったらどうしても冊封体制に触れざるを得ない)。学生たちは、日本史に関しては中学校で習ってきているにしても、世界史の基礎は教わっていないのだから、いきなり外国の近代史の話をされても理解するのが困難であろう。「世界史の教科書のかなりの部分を遠く離れた欧米の話が占めているというハンデを踏まえれば、世界史全般の基礎知識の提供を疎かにしてはいけない」^[26:14]という見解に筆者は同意する。

また、前近代史はそれ自体で「市民的教養」であるとも考える。たとえば、イスラームの成り立ちやモンゴル帝国の拡大は、正統カリフの名前などの事項を微に入り細に入り知っておくべき必要はないにせよ、概要を知っておくことに意義はあるだろう。

加えて、西欧諸国による植民地化から教え始めることで、アジア・アフリカ・オセアニア・南北アメリカでみられた自律的な発展が学生の目に入らな

くなるという問題もあるのではないか。長安やバグダードの繁栄を教え、大ジンバブエやインカ帝国の発展を講義することは、我々が陥りがちな西欧中心主義への歯止めとなるように思われる。

- 5) 前期中間試験では『平家物語』の現代語訳、前期末試験ではエチオピアの年代記『ガッラの歴史』の和訳^[4:89]をそれぞれ用いた。また、前期末追試では古代ルーシの年代記『過ぎし歳月の物語』の和訳^[11:1-7]を用いた。
- 6) 塩飽史に関しては、郷土史家の著書^[40]を参照したほか、塩飽諸島の本島に赴き、塩飽勤番所や笠島まち並保存センター(真木邸)で展示を見学したり説明を受けたりして情報を得た。また、江戸時代の文化史を講義する際、伊藤若冲作品が本島の吉田邸に所蔵されており、所有者の案内で複製を見学することも自身の体験に即して紹介した。
- 7) 丸亀うちわについては、寺尾徹の記述^[19:5-6]を参考にしたほか、丸亀市に赴き丸亀市立資料館やうちわの港ミュージアムを見学して情報を得た。
- 8) 文献によっては七浦と書いているものもあるが、本授業では先行研究^[9]に従い「八浦」とした。
- 9) なおこの際、ある学生から「そんな僻地の港のことを聞かれてもわからない、そんなことを出題してどうするのか」という趣旨の苦情を受けた。その場は「でも授業で教えたでしょ」と言って乗り切ったのだが、学区が限られている小中学校と違い、本県内に2キャンパスしかない高専には市外からの通学者が多くおり、そのような学生にとってキャンパスが立地する土地の歴史は「郷土の歴史」と感じたいという問題は留意せねばならない。そしてそれと同時に、「僻地」の歴史を軽視する地域差別的な目線をどのように克服するか、というのは、電車も通らない田舎で育ち、マイナー地域と呼ばれる外国の歴史を研究する者として、真剣に向き合わねばならない課題であると感じた(当該学生はクラスのムードメーカー的な存在であり、当該発言も深刻な苦情というよりは面白おかしく不平を述べたものだったが、それでもやはり軽く受け流すことは躊躇われる)。
- 10) 授業では扱っていないが、「樽廻船」や「菱垣廻船」も正答とした。

なお、史料中の船は大阪から江戸に向かっているため、それを「北前船」と呼んでよいのか、という疑義が事前チェックの段階で出されたが、設問の文

面は「下線部bに関連して」であり、直接的に史料中の船を北前船と指し示すものではないので、問題は成立すると判断した。

- 11) なお、この条件には志々島も当てはまるため、仮に志々島と書いた者がいれば正答とする予定だったが、そう答えた者はいなかった。
- 12) 第3次香川県の設置については、授業終了後に最新の文献⁹⁾を入手した。来年度はこれを参考に授業内容を改善したい。
- 13) 日米修好通商条約での開港地は厳密には神奈川・兵庫だが、本授業では横浜・神戸と教えた。
- 14) 本問については些か難しすぎるという懸念があるかもしれないが、本講義ではモンテネグロ史の概略を説明し、板書ではニェゴシュを赤字で強調していることや、エが明白な誤文であることから、解答に支障はなかったと思われる。
- 15) 単純に地域の歴史事項を羅列するだけで、それが世界史的出来事とどのように関わっているのか、を示せなかったことも課題である。地域史と世界史との接続に関する先行研究^{7), 14), 16)}を参照して、より有機的に地域史と世界史とを結びつけられるよう努力したい。
- 16) 特にナショナリズムのような抽象的な概念の説明はうまく伝わったかどうか心許なかったが、研究室に質問に来た学生相手に簡潔な図を示して説明すると納得した様子であったので、黒田祐一による実践¹²⁾で示されているように、わかりやすい概念図を提示することが有効であるかもしれない。
- 17) 同時代の日本では東方問題への関心が高く、新聞に多くの論説が掲載されたことから^{21): 25-27; 22: 85-90)}、日本の史料を用いてバルカン関係の出題をしやすい時期であるといえる。
- 18) 外交文書を用いて地域史を教えた授業実践は、既に矢野慎一と児玉祥一によってなされているが¹⁷⁾、それは早くから外国との交流を持ってきた横須賀の歴史を教える授業であり、外国との交流の歴史に乏しい地域において応用することは難しい。

ただし瀬戸内海の場合は、外国人旅行者によって景観の美しさが発見され、それが日本人にも受容されてきたという経緯²³⁾を考えるならば、横須賀などと同様に外国との直接的な交流の長い歴史を持っているともいえる。今年度の授業では瀬戸内海の発見について取り扱うことができなかったが、来年度

は瀬戸内海史という文脈にも目を向けて授業を行っていきたい。

参考文献

- [1] 荒野泰典と伊藤純郎, 加藤友康, 設楽博己, 千葉功, 村井章介, 大西信行, 大庭大輝, 松丸明弘, 横井成行『高等学校 日本史B 新訂版 [第5版]』東京: 清水書院, 2022年。
- [2] 新谷崇「新設科目『歴史総合』における歴史教育の課題と展望——グローバル化の時代の外国史学習の意義」『茨城大学全学教職センター研究報告』2019年度, 67-80頁, 2020年。
- [3] 石井裕品「香川県独立の父, 実業界のラストサムライ 中野武営」『輝ける讃岐人 1——中野武営・空海・西嶋八兵衛・久米通賢』岡山: 山陽放送学術文化・スポーツ振興財団, 9-62頁, 2022年。
- [4] 石川博樹『『ガッラの歴史』訳注』『アジア・アフリカ言語文化研究』76号, 87-107頁, 2008年。
- [5] 大久保徹也「〈遠見集落〉紫雲出山遺跡——その機能と効力」『平成30年度国庫補助事業報告書 紫雲出山遺跡』三豊: 三豊市教育委員会, 283-298頁, 2019年。
- [6] 小川幸司「苦役への道は世界史教師の善意でしきつめられている」『歴史学研究』859号, 191-200頁, 2009年。
- [7] 海津一朗「地域から考える『歴史総合』——紀伊半島モデルからの提案」『学術の動向』24巻11号, 53-56頁, 2019年。
- [8] 香川県編『香川県史 5 通史編——近代I』高松: 香川県, 1987年。
- [9] 香川県編『香川県史 別編III 普及版——ふるさと香川の歴史』高松: 香川県, 1992年。
- [10] 『令和4年度学校要覧』高松: 香川高等専門学校, 2022年。
- [11] 國本哲男と山口巖, 中條直樹訳『ロシア原初年代記 [新装版]』名古屋: 名古屋大学出版会, 2022年。
- [12] 黒田祐一「世界史の授業における概念図の利用」『高専教育』27号, 215-220頁, 2004年。
- [13] 桑原久男「紫雲出山遺跡と近畿地方」『平成30年度国庫補助事業報告書 紫雲出山遺跡』三豊: 三豊市教育委員会, 267-282頁, 2019年。
- [14] 後藤敦史「もうひとつの『黒船来航』——クリミア戦争と大阪の村々」秋田茂と桃木至朗編著『グローバルヒストリーと戦争』吹田: 大阪大学出版

- 会, 191-216 頁, 2016 年。
- [15] 四国新聞社社史編さん室編『四国新聞 110 年史』高松：四国新聞社, 1999 年。
- [16] 篠塚明彦「地域-日本-世界をつなぐ歴史学習——世界史の中の『民次郎一揆』」『クロスロード——弘前大学教育学部研究紀要』25 号, 25-34 頁, 2021 年。
- [17] 篠塚明彦「弘前からみる東北の近代化——歴史総合における教材化の試み」『弘前大学教育学部紀要』127 号, 47-56 頁, 2022 年。
- [18] 谷崎友紀「近世讃岐の名所と金毘羅参詣に関する基礎的な研究——『金毘羅参詣名所図会』を対象として」『観光振興研究』1 巻 1 号, 65-72 頁, 2021 年。
- [19] 寺尾徹「気候からみた香川県ガイド」守田逸人と平篤志, 寺尾徹編『大学的香川ガイド——こだわりの歩き方』京都：昭和堂, 3-25 頁, 2022 年。
- [20] 時岡晴美「金毘羅参詣と門前町・こんぴら歌舞伎」守田逸人と平篤志, 寺尾徹編『大学的香川ガイド——こだわりの歩き方』京都：昭和堂, 147-167 頁, 2022 年。
- [21] 中澤拓哉「日本・モンテネグロ関係の濫觴——幕末および明治期における外交と言説」『アジア地域文化研究』17 号, 23-50 頁, 2021 年。
- [22] Nakazava Takuja. “Istočno pitanje kroz dalekoistočne oči: Japanski pogledi na ustanke u Hercegovini (1861-1878) [極東から見た東方問題——ヘルツェゴヴィナ蜂起に対する日本の認識 (1861-1878)] .” *Prilozi* 50, str.77-99, 2021.
- [23] 西田正憲『瀬戸内海の発見——意味の風景から視覚の風景へ』東京：中央公論新社, 1999 年。
- [24] 乗松真也「紫雲出山と荘内半島における戦後の観光開発——伝説の流布, 遺跡の発見, 桜植樹の起点としての開発計画」『ミュージアム調査研究報告』8 号, 61-72 頁, 2017 年。
- [25] 乗松真也「紫雲出山遺跡の発見と戦後の観光開発」『三豊史談』9 号, 1-10 頁, 2019 年。
- [26] 濱口忠大「『世界に通用する』世界史教育を目指して」『関学西洋史論集』42 号, 5-15 頁, 2019 年。
- [27] 原田桃子「高専における技術者養成と歴史教育」『ヨーロッパ文化史研究』23 号, 55-68 頁, 2022 年。
- [28] バールイシェフ, エドワルド『日露皇室外交——1916 年の大公訪日』横浜：群像社, 2016 年。
- [29] 三豊市教育委員会編『古代の三豊——三豊市の歴史と文化 1』三豊：三豊市教育委員会, 2011 年。
- [30] 三豊市教育委員会編『近世の三豊——三豊市の歴史と文化 3』三豊：三豊市教育委員会, 2013 年。
- [31] 三豊市教育委員会編『近代の三豊——三豊市の歴史と文化 4』三豊：三豊市教育委員会, 2014 年。
- [32] 宮崎嵩啓「新学習指導要領を批判的に受け止める——高等学校・歴史教育の現場から」『高校教育研究』72 号, 1-6 頁, 2021 年。
- [33] 桃木至朗『わかる歴史 面白い歴史 役に立つ歴史——歴史学と歴史教育の再生をめざして』吹田：大阪大学出版会, 2009 年。
- [34] 桃木至朗「制度の壁か思考の壁か?——暗記オンリーでない歴史の試験をめざして」『学術の動向』21 巻 5 号, 27-31 頁, 2016 年。
- [35] 森新之介「教育勅語原義稿」『早稲田大学高等研究所紀要』12 号, 185-190 頁, 2020 年。
- [36] 安田憲司『近世讃岐粟島の海運』私家版, 2004 年。
- [37] 矢野慎一と児玉祥一「新科目『歴史総合』における大項目『近代化と私たち』の教材開発に向けて——地域教材から幕末・開港期の日仏交流を探る」『同志社大学教職課程年報』11 号, 47-62 頁, 2022 年。
- [38] 山岡健次郎「政治的認識を刷新する——高専教育において『政治経済』を学ぶ目的」『高専教育』34 号, 447-450 頁, 2011 年。
- [39] 山本秀夫「瀬戸内海運と三豊——『荘内八浦』の諸相」『三豊史談』5 号, 21-29 頁, 2014 年。
- [40] 吉田幸男『塩飽史——江戸時代の公儀船方』私家版, 2013 年。
- [41] 和田仁「最後の置県事情」『香川の歴史』9 号, 2-19 頁, 1988 年。